



TITLE:

京大広報 No. 628

AUTHOR(S):

京都大学広報センター

CITATION:

京都大学広報センター. 京大広報 No. 628. 京大広報 2007, 628: 2483-2502

ISSUE DATE:

2007-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196461>

RIGHT:



京大広報

No. 628

2007.11



京都大学と慶應義塾大学との包括協定の締結
左から村井慶應義塾大学常任理事、安西慶應義塾大学塾長、尾池総長、松本理事・副学長
—関連記事 本文2486ページ—

目次

〈大学の動き〉

- ベトナム国家大学ハノイ校、フエ大学との
学術交流……………2484
- 尾池総長がベトナムを訪問……………2484
- 博士学位授与式……………2485
- 京都大学と慶應義塾大学が包括協定を締結……………2486

〈部局の動き〉

- 「次世代免疫制御を目指す創薬医学融合拠点」
開所式を挙……………2486

〈寸言〉

- 大学時代の財産 東久保和雄……………2487

〈随想〉

- 国際交流 名誉教授 伊藤嘉明……………2488

〈洛書〉

- 六弁の桜石 北村雅夫……………2489

〈話題〉

- 近畿地区国立大学体育大会の成績……………2490
- 全国七大学総合体育大会 京都大学が総合優勝
……………2491
- 平成19年度新採用職員研修(後期)で宇治
キャンパスを見学……………2492
- シニアキャンパス2007を開催……………2492

- 中学生向けゼミ体験講座「ジュニアキャンパス2007」
を開催……………2493

- 宇治キャンパスでメンタルヘルス講習会を実施
……………2493

- 宇治地区総合環境安全管理センター発足……………2494

- 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター
公開講座「イメージにあらわれる「文化」と
「意識」—光と影の象徴表現—」を開催……………2494

- 「弁護士法人 くすのき」開所……………2495

- 〈訃報〉……………2495

〈お知らせ〉

- 「第1回京都・先端ナノテクスクール」&「第8回
ナノ工学セミナー」ジョイントフォーラム……………2497
- 農学研究科シンポジウム(No Border Agric.)……………2498
- 無料法律相談のお知らせ……………2498
- 医学領域産学連携セミナー2007……………2499
- 生態学研究センター・オープンキャンパス……………2499
- 能楽鑑賞会……………2500

〈公開講座〉

- 玉城嘉十郎教授記念公開学術講演会(第46回)……………2500

〈日誌〉

- ……………2500

〈隔地施設紹介〉

- フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地
……………2501

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

ベトナム国家大学ハノイ校、フエ大学との学術交流

本学とベトナムのベトナム国家大学ハノイ校およびフエ大学は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、このたび本学と両大学との教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」をそれぞれ交換した。

ベトナム国家大学ハノイ校との「覚書」は、尾池和夫総長とベトナム国家大学ハノイ校 Dao Trong Thi 学長の署名により、平成19(2007)年9月13日(木)に交換された。

同大学は1993年に創設された総合大学。理学、人文社会科学、外国語学、工学等の12学部、7つの研

究所がある。教職員数は2,800人。学部生は40,000人。院生は5,300人。ホームページは <http://www.vnu.edu.vn/>

フエ大学との「覚書」は、尾池総長とフエ大学 Nguyen Van Toan 学長の署名により、平成19(2007)年9月15日(土)に交換された。

同大学は1957年に創設された総合大学。理学、医学、農林、経済、教育、芸術および外国語学部等の8学部、8つの研究所がある。教員数は1,400人。学部生は18,000人。院生は850人。ホームページは <http://www.hueuni.edu.vn/>

(国際部)



尾池総長(中央右)と Dao Trong Thi 学長(中央左)



尾池総長(左)と Nguyen Van Toan 学長(右)

尾池総長がベトナムを訪問

尾池和夫総長は、9月12日(水)～17日(月)の日程で、ベトナム国家大学ハノイ校およびフエ大学を訪問した。

9月13日(木)は、ベトナム国家大学ハノイ校で「学術交流に関する一般的覚書」に調印し、午後は、ハノイ校で開催の日越空間情報学コンソーシアムのワークショップに参加し、特別講演を行った。

14日(金)はハノイ校主催の学術交歓会に出席し、協定締結後の具体的な交流活動について議論を行った。

15日(土)はフエ大学で「学術交流に関する一般的覚書」に調印し、午後はフエ市から車で約1時間30分の山岳にある地球環境学堂教育研究拠点の研究学



フエ市において「国際交流科目」海外臨地研修中の学部学生との交歓。習センターの活動状況を視察後、Aluoi 県 Hong Ha 村で、本学とフエ大学が連携して行っている国際協

力機構(JICA)草の根パートナー事業のプロジェクト活動を通じて現地住民により建設されたコミュニティハウスの落成披露式に参加し、ベトナム語を交えたユーモアある祝辞を述べ、村民から暖かい歓迎を受けた。

16日(日)は、フエ市内にある地球環境学堂の海外拠点事務所を視察した後、国際交流科目のカリキュラムの一環として約2週間の海外臨地研修を受講している本学学部学生(12名)および現地での教育・研

究に参加している地球環境学堂の大学院生等と昼食懇談会を行った。

ベトナムの大学との協定はこれが初めてであるが、両大学には人文科学から自然科学に亘る優秀な研究者が在籍しており、本協定締結を契機に両大学との交流がさらに進展し、教育・研究の上で、大きな成果をもたらすことが期待される。

(国際部)

博士学位授与式

9月25日(火)午前10時30分から、時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長、東山紘久理事・副学長(教育・学生担当)をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記(7月23日付、9月25日付)が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時30分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。

総長式辞は総長室ホームページをご覧ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/070925_1.htm

学 位	平成19年7月			平成19年9月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	—	—	—	—	1	1
博士(教育学)	—	—	—	3	1	4
博士(法学)	—	—	—	—	—	—
博士(経済学)	5	—	5	5	—	5
博士(理学)	6	2	8	7	1	8
博士(医学)	13	3	16	4	7	11
博士(社会健康医学)	—	—	—	—	—	—
博士(薬学)	—	1	1	—	2	2
博士(工学)	4	5	9	31	1	32
博士(農学)	2	2	4	3	4	7
博士(人間・環境学)	—	—	—	—	—	—
博士(エネルギー科学)	—	—	—	6	—	6
博士(地域研究)	1	—	1	2	—	2
博士(情報学)	1	1	2	8	—	8
博士(生命科学)	3	—	3	2	—	2
博士(地球環境学)	—	—	—	2	—	2
計	35	14	49	73	17	90



7月23日付 博士学位授与者



9月25日付 博士学位授与者

京都大学と慶應義塾大学が包括協定を締結

京都大学と慶應義塾大学は、9月27日(木)に研究や教育など包括的に連携する協定を締結した。

「ヒト・社会・地球」をテーマに、再生医療などの分野で共同研究を進め、アジア地域の学術ネットワークの構築や若手研究者の育成を図る。京都大学の基礎研究、慶應義塾大学の実学というそれぞれの特色を生かし、アジアを中心とする地域研究、国際的な人材育成、医学・生命科学、経済学の4分野で重点的に協力関係を発展させる。両大学のアジア拠点を合わせると14ヵ国54拠点に亘り、このネットワークを使いアジアに関する共同研究や情報発信を加速させる。

連携協定の調印式は慶應義塾大学の三田キャンパスで開かれたが、京都大学吉田キャンパスともネッ



共同記者会見（東京）の様子をネットワークで中継

トワークをつなぎ遠隔中継を行った。

(研究推進部)

部局の動き

「次世代免疫制御を目指す創薬医学融合拠点」開所式を挙行

10月16日(火)医学研究科「京大アステラス融合ラボ」の開所式が行われた。

「京大アステラス融合ラボ」は、京都大学とアステラス製薬(株)が協働して進めている、「次世代免疫制御を目指す創薬医学融合拠点」の中核研究施設として使用するため、本年7月から医学部構内B棟で改修工事(1,300㎡)を進めてきたもので、このたび工事が完了し、本格的な研究活動を開始することとなった。

本拠点は、京都大学が持つ世界最先端の基礎免疫学研究の成果と、アステラス製薬の免疫抑制グローバル医薬品に代表される創薬技術の融合による、次世代の革新的免疫制御の創出を目指す協働開発研究で、平成19年度文部科学省の科学技術振興調整費による「先端融合領域イノベーション創出拠点の形成」プログラムに採択されたことを受け、本格的な創薬医学融合拠点を始動することとなったものである。

「京大アステラス融合ラボ」には、公募による創薬若手研究グループ10チーム、創薬基盤プロジェクト

グループ2チームのほか、アステラス派遣創薬研究チーム、技術支援チーム、知財マネージャーの30人を超える研究者が集い、学内中核研究者グループとの連携の下、従来の日本には存在しなかった大学と企業の「産学融合ラボ」での協働研究により、創薬医学研究の統合的システムイノベーションを創出し、次世代免疫制御の開発と革新的創薬を目指す。



アステラス製薬(株)竹中登一共同会長(左)と尾池和夫総長

(大学院医学研究科)

寸言

大学時代の財産

東久保 和雄



私が入学した昭和44(1969)年は大学紛争の後半にあたり、紛争の影響で4月から12月まで授業はなく、1回生は約3か月で済ませたことになります。入学から9か月は全くの自由人。部活に専念する者、アルバイトで稼いで旅行する者、マージャン三昧、田舎に帰る者、などなどでクラスは入学後9か月間バラバラでした。私も受験勉強から解放され、京都近辺を歩き回ったり、旅行に行ったり、読書習慣を身につけたり、一生のうちでこれほど優雅な生活は二度とないだろうと思っていました。その年は東京大学の入試のない年で、通常以上に関東からの出身者を始め全国から集まってきていました。このようなクラスだったのか、3回生で専門学科に進んだ後も、先生方から変わったクラスだと言われ続けました。当時の学科では、50名中10名程度は毎年留年していましたが、我々のクラスでは留年した人はゼロという異常な状況でした。卒業後はクラス会もなかったのですが、ようやくこの10年前くらいから開かれ出してきました。

私は博士課程まで進みましたが、この大学院での講座生活は後の私に大きな影響を与えました。この講座では院生の自主性が重んじられ、先輩・後輩関係なく研究の方向性や具体的進め方など話し合っ決めていました。したがって、与えられた研究テーマを行うということではなく、自ら探索し、いろいろな先生方を探して教えを請い、輪読などで研究レベルを上げる、ということを繰り返し進めていきました。ここで研究に対する探索心、独立心、自主性などが身についたと思っています。そのような講座でしたので、院生同士の結束は堅く、ここで一生の仲間を得ることができました。彼等とは今でも年1回温泉旅行に出かけて昔話に花を咲かせています。

私の研究はコンピュータを用いた液体のシミュレ

ーションでしたので、実体のある目に見えることもやってみたいという気持ちとすぐにアカデミックポジションもなかったこともあり就職を考えました。就職先として、知人がいたこともあり昔からなじみのある化粧品メーカーの資生堂を選びました。友人からは、何でお前のようなダサイ男が資生堂なのだと大分いぶかれましたが。

最近、ポスドクの就職難が話題になっており、ドクターコース出身者は、専門志向が強すぎる、コミュニケーションが下手だ、使いにくい、などいろいろ言われています。私自身博士課程から入社しましたが、それで困ったことは一度もありませんでした。ドクターコース出身者というステレオタイプの捉え方ではなく、やはり個人個人の問題だろうと思います。また、ポスドクは即戦力だといっても、会社人生はその先何十年も続きますので、入社の特長性だけで過ごせる人はほとんどいません。入社してから自分の領域を如何に広げるかが重要になります。会社としても修士修了の人だけでなく、中途採用、外国人など多様な人材が求められており、ポスドク採用にもっと積極的になれと思っています。

私は最初は研究所に入り、化粧品の素材開発などを行い、その後に本社に移り研究開発の戦略・企画を中心とした仕事に携わりました。今は、再び研究現場に身を置いています。化粧品は皮膚科学を中心とした生化学、コロイド科学などの物理化学、化粧品用素材開発のための有機化学、粉体開発などの無機化学、各種計測技術から心理学や社会学などの多様な学問領域から成り立っています。技術系で入社して化粧品の商品企画やマーケティングに進む人もいます。化粧品といっても華やかな広告の世界だけでなく、地道な研究開発の世界でもあります。それで私のような人間でも務まっているのかも知れません。店頭で化粧品を見かけたら、いろいろな研究成果からそれは生まれてきていることを思い描いていただけたらと思っています。

(とうくぼ かずお 株式会社資生堂執行役員
昭和48年工学部卒、昭和53年博士課程修了)

随想

国際交流

名誉教授 伊藤 嘉明

私は京都大学を平成14(2002)年3月に定年退官し、4月からシンガポールで研究活動が続いている。日本を去ってシンガポールに研究室ごと移る際に新聞やテレビで少し話題になった為と思うが、シンガポールに移ってから大学、研究所関係者から政治家にいたるまで多くの来訪者がある。その方々から、シンガポールで進行中のライフサイエンス振興の現状と将来性について質問されるが、最後に日本の国際交流はどうあるべきか、という問題にいきつくことが多い。



殆どの場合、国際交流というのはなにかそれ自身が良いこととはじめから決めていて、そもそも国際交流は何故必要か、何がよいのかという点をとばして話が始まる。私はそのあたりをもっと議論したいな、と思うことがしばしばである。例えば文部科学省がまとめている将来計画にはかなり前段で国際交流の必要性、とりわけアジアとの交流の重要性が書き込まれている。しかし「何故」にはあまりふれていない。

国際交流と一口に言っても、それはそれぞれの分野で内容の異なる極めて多岐にわたる活動であろう。私の体験は限られたものではあるが、その体験からすると日本は先進国の中で「特殊な国である」と思う。外国から日本を見るとこれを強く感じざるを得ない。シンガポールの建国の父である Lee Kuan Yew は「日本に旅行していろいろのところを訪問することはできるが日本に住むことはできない。しかし世界中の誰でも望めばシンガポールに住むことに障壁は殆どなく違和感はないであろう」と言っている。英語が常用語であること、社会が欧米型にできていることが大きな要因であろう。シンガポールはまさにこれを狙って国づくりをして来たと思われる。即ちコスモポリタンが世界中から集まってきて

経済活動、研究活動等をやれるような国を目指し、その求心力を作る努力をしている。そしてここで重要なのはやはり言葉である。

サイエンスには国境はないので、日本の科学者が自由に世界の科学者と「交流」できることは極めて望ましいし、現状はかなりそれに近いと思う人も多いかもしれない。実際大部分の日本人学者は国際会議で自分の研究成果を英語で発表することに何の支障も感じないと思う。しかしよく見ると、現状はとても満足すべき状況とは言い難い。私の体験では、英語圏の大学や研究所、学会等でその運営方針、将来計画等の問題で高度な自由討論をする時、日本人でこれに自在に参加できる人は極めて限られている。平均の日本人学者はとても任にあたれない。これは日本の科学界の背負うハンデイである。国際社会における日本人の地位を大きく損なっている。このハンデイからくる日本の「損失」は強く認識されるべきである。

私は日本を英語国にすべきだ、などと言っているのではない。国際交流という時国際会議に補助金を出すというレベルの発想でなく、国際交流は「国益の為」である、ということをしかり腹に据えてことにあたるべきだと考える。勝れた業績にささえられた高い見識と品格をそなえた国際的日本人を一人でも多く輩出することが望ましいというならば、具体的にはそのような人物とはどのような人であるのかを深く認識する努力をすべきである。そしてどうしたらそれが実現できるのか。国際交流を口にする時、国際交流は何故「よいこと」なのかをもっと広く深く議論する必要があるように思う。そして日本の負うハンデイを少しでも軽減する努力が必要である。日本の「特殊性」が、弱点と映るよりも、それにより醸し出されるユニークな文化の方が評価されるようになるまで、国際交流の實をあげる努力をすべきものと考えます。

(いとう よしあき 平成14(2002)年退官 元ウイルス研究所教授 現シンガポール分子細胞生物学研究所教授、国立シンガポール大学医学校分子腫瘍学研究所所長、専門は分子腫瘍学)

洛書

六弁の桜石

北村 雅夫

国の天然記念物で所在地として京都府が指定されているものが10件あります。そのうちのひとつが亀岡市稗田野の桜天満宮周辺に産する桜石であります。これは董青石(きんせいせき)という鉱物が外形を保ったまま雲母類に変質したものです。そのため、桜石は簡単に折ることができ、真中あたりを折ると内部にあった六角形の芯とそれを取り巻く六弁の花びらからなる金色の模様がきれいに見えます。世界的にも珍しいものでありますが、なぜか京都周辺にはよく産出します。たとえば、京都大学の近くでも大文字の送り火で有名な如意が岳の北斜面や銀閣寺境内にある岩石中に桜石が入っています。桜天満宮の伝承によると菅原道真の太宰府への配流の後に、京都の館からこの地に移植された桜が石になったとされています。学生たちには、これほど形成年代と成因が分かった鉱物は他に類を見ないという冗談を言ったりもします。

この桜石に興味を持ちその成因の科学的な理解を一応すませましたが、疑問なことが残っています。それは、山桜など古くから日本の山にある桜は一般に五弁ですが、桜石は六弁であることです。五弁でなく六弁なのは、結晶の対称性として六回対称性がありますが準結晶の場合を除いて五回対称性がないことによるものです。ある結晶学者の研究によると、中国では紀元前150年頃に、草木花の多くは五弁、雪は六弁であると書かれてあるといいます。氷は六回対称性を持ちます。また、アラビア人も古くから対称性の高いタイル張りを得意としてきました。したがって、中国人やアラビア人がこの石を見て桜とは思わないのかもしれませんが。日本人は、なぜこの六弁の石を桜と呼ぶのでしょうか。

六弁の花の結晶といえば雪の花が代表的です。雪の研究者によると、江戸後期の天保年間に書かれた



亀岡市稗田野の桜天満宮周辺に産する桜石(写真:幅4 cm)

「雪華図説」には、初めて科学的な観察を通して雪の花が描かれています。そのため、日本人が科学の目を通して対称性を認識したのは江戸後期かもしれません。しかしながら一方で、法隆寺金堂の欄干である卍崩し勾欄など江戸時代以前から多くの対称性の高い模様が使われていますので、中国の影響も大きいのかもしませんが古くから日本人が対称性を認識していなかった訳ではなさそうであります。したがって、桜は五弁、桜石は六弁であることを認識はしていたはずだと思います。

現在でもいろんな人がこの六弁の桜石を見て、桜であるということに異議を唱えたのを見たことはありません。現在においても厳密性にあまりこだわらない日本人が多いといえるでしょう。このようなものの認識の仕方は、自然現象をその雰囲気のままに素朴に受け入れるという感性につながっているのかもしれません。そういう意味では、科学を進める上で最も重要な知的好奇心の発現にも独特の感性があるとも言えそうです。現在、国際化や国際交流が盛んになりつつありますが、このような感性も大事にしていくべきと考えます。また、昨今、大学内外でいわゆる“役に立つ”研究の推進が盛んに推奨されています。桜石の不思議についての研究などは何の役にも立たないものとして扱われそうですが、このような研究をたとえ細々としても継続していくことこそが学問の場としての大学が果たすべき役割とも考えています。

(きたむら まさお 理学研究科教授、専門は鉱物学)

話題

近畿地区国立大学体育大会の成績

大阪教育大学が当番校となり開催された第45回近畿地区国立大学体育大会は5月6日(日)の「ラグビー」から8月24日(金)の「ソフトテニス・弓道」まで、17競技種目において各大学がそれぞれの競技の当番大学となり熱戦が展開された。

本学は「バスケットボール(男子)」「剣道(男子)」の種目で優勝し、各競技において実力を発揮し総合成績では、男子が3位、女子が7位に終わった。なお、本大会の成績は以下のとおりである。

(学生センター)



男子チームが優勝した剣道部

得点表(女子)

種目 NO	大学名 種目別	滋賀大	京都大	京教大	工織大	大阪大	大外大	大教大	神戸大	兵教大	奈教大	奈女大	和 大
1	陸上競技		4	10			5	7					
2	水泳		5			7		10				4	
3	テニス	4	5									10	7
4	ソフトテニス		4.5					10	7		4.5		
5	バスケットボール			10				7			4		5
6	バレーボール			7				10		4.5			4.5
7	サッカー			7				10			4.5		4.5
8	卓球	5				10			4			7	
9	バドミントン			5				10	7				4
10	剣道						7	10	4.5				4.5
11	体操競技							10	7				
12	ハンドボール			7				10	5	4			
13	弓道			4	10		7						5
	合計得点	9	18.5	50	10	17	19	94	34.5	8.5	13	21	34.5
	総合順位	11	7	2	10	8	6	1	3	12	9	5	3

得点表(男子)

種目 NO	大学名 種目別	滋賀大	京都大	京教大	工織大	大阪大	大外大	大教大	神戸大	兵教大	奈教大	和 大
1	陸上競技			4		7		10	5			
2	水泳		5			7	4	10				
3	野球			10			4	7				5
4	軟式野球	7							5	10	4	
5	テニス		5					7	10			4
6	ソフトテニス		4.5					10	7			4.5
7	バスケットボール		10	5				7	4			
8	バレーボール					7		10	4.5			4.5
9	サッカー			5		4		10	7			
10	ラグビー	4						7	10	5		
11	卓球	4				7			10			5
12	バドミントン				5			7	10			4
13	柔道	4				7		5	10			
14	剣道		10			4.5		4.5	7			
15	体操競技		5			7		10				
16	ハンドボール		7	5	4			10				
17	弓道		7		10				4			5
	合計得点	19	53.5	29	19	50.5	8	114.5	93.5	15	4	32
	総合順位	7	3	6	7	4	10	1	2	9	11	5

全国七大学総合体育大会 京都大学が総合優勝

第46回全国七大学総合体育大会は平成19年7月7日(土)七夕の日に行われた開会式を挟み、同18年12月10日(日)の「アイスホッケー」を皮切りに同19年9月15日(土)の閉会式まで、41競技種目(公開競技2種目を含む)にわたり京都大学の主管で開催された。

本学は主管校として、優勝の大きな期待を背負いながらも、そのプレッシャーをものともせず堂々の総合優勝を勝ち取った。また、優勝を祝っての祝賀会が10月25日(火)にカンフォーラにて催された。

(学生センター)



総合優勝を喜ぶ本学実行委員

		北海道大学		東北大学		東京大学		名古屋大学		京都大学		大阪大学		九州大学	
		順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点
アイスホッケー		3	6	1	10	不参加		2	8	5	3	6	2	4	4
スキー競技		不参加		不参加		2	8	3	6	4	4	1	10	5	3
馬術		3	4	2	6	4	3	5	2	1	8	該当団体なし		6	1
グライダー		7	1	2	8	4	4	3	6	1	10	6	2	5	3
柔道		3	5	2	8	5	3	6	1.5	1	10	6	1.5	3	5
少林寺拳法		4	4	6	2	3	6	7	1	1	10	2	8	5	3
硬式テニス	男子	6	2	2	8	7	1	1	10	4	4	3	6	5	3
	女子	7	1	2	8	1	10	5	3	4	4	3	6	6	2
ソフトボール		該当団体なし		5	2	4	3	6	1	2	6	1	8	3	4
空手道		6	2	5	3	1	10	7	1	3	6	2	8	4	4
水泳	男子	3	6	6	2	5	3	4	4	2	8	1	10	7	1
	女子	1	10	3	6	5	3	6	2	4	4	2	8	7	1
剣道	男子	6	2	1	10	4	4	3	6	2	8	5	3	7	1
	女子	1	10	4	4	3	6	5	3	6	2	7	1	2	8
バスケットボール	男子	1	10	6	2	2	8	5	3	3	6	4	4	7	1
	女子	3	6	1	10	7	1	2	8	5	3	4	4	6	2
陸上競技	男子	7	1	2	8	5	3	1	10	4	4	3	6	6	2
	女子	2	8	4	4	6	2	1	10	3	6	7	1	5	3
フェンシング		4	3	2	6	5	2	該当団体なし		1	8	3	4	不参加	
ラクロス	男子	5	3	6	2	2	8	不参加		4	4	1	10	3	6
	女子	4	4	6	2	1	10	3	6	2	8	5	3	7	1
バドミントン	男子	2	8	3	6	4	4	6	2	5	3	7	1	1	10
	女子	1	10	5	3	7	1	2	8	4	4	6	2	3	6
準硬式野球		5	3	6	2	4	4	1	10	2	8	3	6	7	1
バレーボール	男子	1	10	7	1	2	8	6	2	4	4	5	3	3	6
	女子	3	6	4	4	5	3	2	8	6	2	7	1	1	10
硬式野球		不参加		5	3	6	2	2	8	4	4	3	6	1	10
自動車操		3	6	2	8	5	3	7	1	4	4	1	10	6	2
体操		1	10	6	2	3	6	4	4	7	1	2	8	5	3
ハンドボール		2	8	5	3	1	10	4	4	3	6	6	2	不参加	
ソフトテニス	男子	4	4	7	1	5	3	6	2	3	6	1	10	2	8
	女子	2	8	6	2	7	1	3	6	1	10	4	4	5	3
弓道	男子	5	3	4	4	1	10	7	1	3	6	2	8	6	2
	女子	4	4	1	10	5	3	7	1	2	8	6	2	3	6
アーチェリー		5	3	6	2	4	4	7	1	3	6	2	8	1	10
ゴルフ		5	3	3	6	6	2	2	8	1	10	4	4	不参加	
卓球	男子	5	3	1	10	6	2	4	4	3	6	2	8	7	1
	女子	3	6	6	2	2	8	4	4	7	1	1	10	5	3
ヨット		*	1	*	1	*	1	*	1	*	1	*	1	*	1
総合得点		184		181		173		166.5		216		199.5		140	
総合順位		3		4		5		6		1		2		7	

※ヨット競技は悪天候により中止となったため、各大学に1点ずつ加点された。

平成19年度新採用職員研修(後期)で宇治キャンパスを見学

新採用職員研修(後期)プログラムとして、9月6日(木)午後2時から宇治キャンパスの見学が実施された。研修生14人は柏原 明宇治地区事務部総務課長からキャンパス紹介と概要説明を受けた後、防災研究所強震応答・耐震構造実験室で大型震動台に載せられたコンクリート壁に阪神・淡路大震災と同規模の震動を与える加震実験を見学し、同研究所境界層風洞実験室ではビル風や構造物に対する強風被害の発生メカニズムの解明をする風洞実験装置で、測定胴長21mに及ぶ風洞から吐出された風速25m/sの強風を体感した。

引き続いて、生存圏研究所エコ住宅実験棟「律周舎」で自然素材を活用した木造軸組住宅の居住性を体験し、同研究所白蟻飼育室ではシロアリが木材の質や部位を好み分けする生態や木材以外にも餌にする雑食性について説明を受け、約9万匹のシロアリ飼育の模様を見学した。最後に同研究所材鑑調査室で屋久杉の標



境界層風洞実験室を見学する研修生

本を用いた年輪年代学の解説を受け、香木をチップ化した標本や高級扇子で有名な白檀の原木や、現在は世界で唯一、同調査室が保有する法隆寺五重塔心柱材などの研究材料や貴重な標本に触れ、体験を主体とした有意義で楽しい研修プログラムを受講した。

(宇治地区事務部)

シニアキャンパス2007を開催

今年で3回目となる「シニアキャンパス」が9月18日(火)～21日(金)の日程で開催され、北は北海道から南は大分まで、53歳～83歳の方36人が参加した。

今回は、「交響する身体ーひと・もの・自然が奏でる第三楽章ー」をテーマにしたもので、1日目は時計台記念館で開講され、尾池和夫総長の「歓迎の挨拶」を皮切りに、オープニング講義、サロントークのほか、記念撮影や懇親会が行われた。

2日目の午前には、吉田南キャンパスの講義室で、経済学やアルツハイマー治療薬開発に関する講義、午後には3コースに分かれて、医学部附属病院薬剤部・武田薬品工業株式会社京都薬用植物園、花山天文台および総合博物館等でフィールド学習が行われた。また、受講者は夕刻の「未来フォーラム」も聴講した。

3日目は、「芦生をめぐる」と「ホワイトナイルの源流を探る」のコースに分かれて、京都府南丹市美山町・芦生研究林、物集女キャンパス栽培植物起源学研究室・黄桜株式会社ビール工場等で午前午後を通したフィールド学習が行われた。

また、その夕刻には、宿泊所の京都ロイヤルホテルと美山町の民宿とで並行し、「学びを語りあう夕べ」が催された。



開講式での尾池総長の挨拶

最終日の午前には、時計台記念館で、前日の「学びを語りあう夕べ」での意見を発表する「ゼミナール」、東山紘久理事・副学長よる「歳を重ねる喜びと哀しみ」と題する特別講義が行われ、修了式では、4日間の全課程を修了された受講者一人ひとりに東山理事・副学長から修了証書が手渡された。

また、午後の「見どころツアー」には、自由参加にもかかわらず、ほとんどの受講者が参加され、「学内施設見学コース」と「学外散策コース」の2班に分かれて、時計台記念館展示室・免震装置、尊攘堂、清風荘や三高の歌碑(吉田山)、吉田神社、真如堂等を見学した。

今回のシニアキャンパスも大変好評で、受講者から、来年も引き続き実施してほしいとの声が寄せられた。

なお、今回は、本学関係者のほか、京都府商工部、

美山町観光協会、黄桜株式会社、武田薬品工業株式会社、向日市物集女公民館等の協力を得て実施した。

(教育推進部)

中学生向けゼミ体験講座 「ジュニアキャンパス2007」を開催

9月29日(土)・30日(日)の2日間、京都市教育委員会との共催により、中学生に学問の最先端に触れてもらうことを目的として、実験、工作、自然観察、天体観測などの体験型のゼミや、テキストをもとに議論するゼミ等で構成する「ジュニアキャンパス2007」を開催した。

今年で3回目となるジュニアキャンパスには京都市や近郊地域のみならず、遠くは宮城、広島からの参加者を含め、中学生約220名・保護者等約80名の参加があった。

1日目の午前中は、開講式およびオリエンテーションを行い、その後、中辻憲夫再生医科学研究所長が中学生対象に特別講義「ES細胞の驚異的能力と可能性—なぜ万能細胞と呼ばれるのか」を、並行して東山 紘久理事・副学長が保護者等対象に講演会「子どもの心を知る聞く技術」を行った。

1日目の午後と2日目は、吉田・宇治・桂の各キャンパスや花山天文台等の研究施設で少人数制による30講座のゼミを開講した。2日目の午後にはゼミと並行



ゼミ「木材解剖学—レンズで見る木のつくり」
(生存圏研究所 杉山淳司教授)の様子

して、時計台免振装置・尊攘堂・総合博物館を見学する「キャンパスミニツアー」を実施した。また、今回は、女性研究者支援センターによる、女性研究者を目指す中学生を対象にした特別協賛ゼミを新しく開講した。

このほか、昼の休憩時間中に本学学生による「大学何でも相談コーナー」を設けたが、ここでは中学生からの活発な質問が飛び出した。

(教育推進部)

宇治キャンパスでメンタルヘルス講習会を実施

宇治キャンパスでは、9月26日(水)午後2時30分から安全衛生教育・講習の一環として教職員や大学院生等の宇治地区構成員を対象に、あわの診療所所長栗野菊雄氏を講師に招き、「職場のメンタルヘルス」をテーマに講習会を開催した。職場環境や業務内容から想定される活力の減退や作業環境管理の諸問題とその対応策、人の様々な機能に作用する「疲れ」の段階や回復の目安などが判りやすく紹介された。労働によって健康に害を及ぼすことのないように、日頃から仲間同士で防止に取り組む意識の大切さや、身体に異変が現れる段階や現象に参加者は強い関心を寄せていた。また会場で聴講していた教職員・学生からは多くの質問があり、活発に意見が交わされた。



栗野氏と講習に聞き入る参加者

(宇治地区事務部)

宇治地区総合環境安全管理センター発足

宇治キャンパスでは環境保全・安全衛生管理・安全衛生教育を総合的に推進するとともに、環境・安全・衛生関連の各委員会との協力、連携を図ることを目的に「宇治地区総合環境安全管理センター」が10月1日に設置された。同センターの発足に伴い、堀井文敬化学研究所教授がセンター長に就任し、専任職員として特定職員1人が配置された。

これまで宇治キャンパスでは、施設環境課に設置されていた安全衛生管理室が主体となって安全衛生管理業務を実施していたが、今後は同センターが中核となって一元的な管理体制の下に実効率の向上、構成員の意識向上を目指し、環境安全保健機構との連携を図り、環境・安全衛生の支援拡大を図っていく。



左から柳澤 明特定職員、堀井センター長、石原和弘防災研究所長

(宇治地区事務部)

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座 『イメージにあらわれる「文化」と「意識」—光と影の象徴表現—』を開催

臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人の心の理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

今年度は、箱庭療法家であり、センター客員教授のシェリー・レンム・シェファード氏、センター客員准教授の名取琢自氏を講師として、10月8日(月・祝)の午後1時から、時計台記念館国際交流ホールで行った。

講演では、文化的背景が個人に及ぼす影響の大きさに触れ、国際化が進む現在における心理的危機や自己実現のプロセスをテーマとした講義のあと、箱庭療法の事例を通して、宗教性とその統合についてのイメージ表現が取り上げられた。後半の質疑応答では、参加者から活発に質問や意見が出され、国際化をめぐる起こる様々な問題や課題をいかに個人が取り組んでいくか、また箱庭療法についてフロア全体で深める場となった。

本講座は、毎年参加者からの好評を得ており、複雑な心の問題を理解していく上で不可欠な、人間の存在自体を見つめ直すことに繋がるテーマが話し合われる貴重な機会となるよう、来年度以降も開催していくことを考えている。



参加者の質問に答えるシェファード客員教授(左)と名取客員准教授

(大学院教育学研究科)

“弁護士法人 くすのき”開所

「弁護士法人くすのき」の看板上掲式が、10月15日(月)に尾池和夫総長、中森喜彦理事・副学長、初宿正典法学研究科長、山本克己法科大学院長、中田昭孝弁護士(法学研究科教授)が出席し、工学部4号館1階の弁護士事務所前で行われた。

「弁護士法人くすのき」は、通常の法律事務所と同様の業務を行うと共に、法科大学院の臨床系教育(主として法律相談演習)の支援を行う。

また、本学と顧問契約を締結し、部局ならびに教職員、学生からの法律相談にも応じる。

【弁護士法人くすのきの業務時間等】

所属弁護士：中田 昭孝

(京都弁護士会所属・京都大学大学院
法学研究科教授)

場 所：工学部4号館1階

受 付：月曜日～金曜日(休日、年末・年始を除く)

午前10時～午後5時(昼休みを除く)

T E L : 075-761-5707

F A X : 075-761-5714



看板上掲式の様子 左から中田教授、尾池総長、初宿研究科長

(大学院法学研究科)

訃報

このたび、こいずみなお かず小泉直一名誉教授、ふじさかひろ かず藤坂博一情報学研究科教授、よしだ ふみたけ吉田文武名誉教授、せ ぎき瀬崎 仁 名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

小泉 直一 名誉教授



小泉直一先生は、7月4日逝去された。享年87。

先生は、昭和20年9月京都帝国大学理学部化学科を卒業、京都大学化学研究所助教授を経て、同36年同大学化学研究所教授に就任、電気材料研究部門を担当された。昭和60年停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生はマイクロ波から超低周波にわたる広い周波数領域の誘電分光法の開発を行い、それを用いて、会合性極性液体、高分子水溶液、高分子固体、コロ

イドなどの誘電特性に関する物性研究に力を注いだ。とくに、会合性液体の構造、高分子分子鎖の運動、フッ素系高分子の強誘電体の研究は国内外で高く評価されている。

先生はまた、日本化学会代議員、高分子学会研究会運営委員長、電気物性国際会議実行委員長(昭和60年)などを務められ、この分野の発展において指導的役割を果たすとともに、国際的研究交流に尽力された。これらの一連の教育研究活動、学会活動により、平成8年11月に勲三等旭日中綬章を受けられた。

(化学研究所)

藤坂 博一 情報学研究科教授



藤坂博一先生は、8月21日逝去された。享年58。

先生は、昭和46年九州大学理学部物理学科を卒業された後、同大学大学院理学研究科に入学、同52年同大学院博士後期課程を修了された。その

後、日本学術振興会奨励研究員、西ドイツフンボルト財団奨学研究員等を経て、昭和57年鹿児島大学理学部講師に就任され、同59年同助教授に昇任、平成元年九州大学理学部助教授に転任された。平成10年4月京都大学大学院情報学研究科の設置と同時に、同研究科複雑系科学専攻・複雑系力学講座の教授として着任された。平成12年度および同16年度には同専攻の専攻長を務めて情報学研究科の管理運営に貢献されたほか、同17年度には工学部情報学科長として同学科の管理運営にも尽力された。

先生は、非平衡統計力学と非線形物理学の分野で

多くの先駆的な研究を行い、この分野の発展に大きく寄与され、とくに非線形結合系が示す「カオス同期」と呼ばれる現象、および同期状態が破れた「オン・オフ間欠性」と呼ばれる現象を世界に先駆けて発見し、これらの現象の基本的な特性を解明された。先生のこれらの現象に関する研究は、国際的評価も高く、日本のカオスに関係した研究の中で記念碑的な重要業績の1つであると言える。先生は、さらに乱流統計理論、動的相転移、大偏差統計力学に関する研究でも顕著な業績をあげるなど、非平衡統計力学と非線形物理学の分野において指導的役割を果たされた。また、平成4年から同5年にかけて日本物理学会九州支部長を務めるなど、学会の発展にも寄与された。さらに、教育においては、学生への的確な研究指導および優れた講義・著書を通して、多数の有能な人材を育成された。

(大学院情報学研究科)

吉田 文武 名誉教授



吉田文武先生は、9月5日逝去された。享年94。

先生は、昭和12年京都帝国大学工学部工業化学科を卒業され、株式会社日立製作所勤務の後、同15年4月京都帝国大学工学部講師に就任された。

昭和21年に助教授として化学機械学第三講座を担当された後、同26年8月には教授に就任、化学機械学第二講座(後の化学工学熱力学講座)を担当され、長く教育と研究に尽力された後、同51年停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。この間、学内および国内学会等の役職はもとより、国際交流に極めて多大な貢献をされ、コロンビア大学、エール大学、ウィスコンシン大学での在外研究に加え、カリフォルニア大学(バークレー校)およびペンシルベニア大学の客員教授として講義を担当された。なお本学退官後も、国際学術誌「Chemical

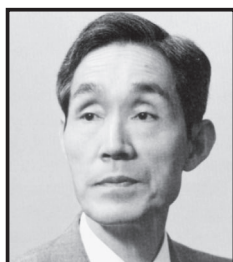
Engineering Science」のアジア地区エディタとして、20年以上に亘る献身的活動を続けられた。

先生は、古典的単位操作である蒸留・吸収装置の性能評価と設計法に関する研究で幾多の成果を挙げたことに留まらず、炭化水素発酵の機構や発酵槽の性能に関する先駆的研究を開拓され、生物工学分野に多大な貢献をされた。さらに、人工肺や人工腎臓に関する速度論的研究に取り組み、新規な人工肺を開発して臨床的に実用に供するなど、世界に先んずる研究を展開された。著書「化学工学と人工臓器」にも実を結ぶこれらの研究は、昨今ようやく活発化を見ている医学・工学境界領域を開拓した先駆的業績であり、世界的に高い評価を得ている。

先生の功績ゆえ、全米工学アカデミーは、昭和54年、"Leadership in Chemical, Biochemical and Biomedical Engineering"を認め、国外客員(終身)に選出した。

(大学院工学研究科)

瀬崎 仁 名誉教授



瀬崎 仁先生は、9月18日に逝去された。享年78。

先生は、昭和28年京都大学医学部薬学科を卒業後、医学部附属病院助手、薬学部助教授を経て、同46年に薬学部教授に就任され、さらに同61年に薬学部長、薬学研究科長に就任し、教育・研究の環境整備に努めて薬学部における独立専攻の設置、大学院重点化、あるいは施設整備などの発展の礎を築かれた。平成4年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。さらに、摂南大学薬学部において教授、薬学部長、薬学研究科長を務め同14年に退職された。

先生は、薬物投与の方法論を研究する薬剤学を専

門とし、薬物の消化管吸収に関する研究や製剤開発に関する研究を推進して、創薬科学の学問基盤の構築に大きく貢献した。特に、DDS(薬物送達システム)という医薬品投与に関する新しい技術および思想の領域において、その創成期より先駆的研究を展開し、学問の体系化を主導すると共に、薬学のみならず医学や工学を統合した新しい研究領域としてこれを育てた。また、多くの優れた研究業績をあげ、国際薬学連合(FIP)のMillennial Pharmaceutical Scientist Awardをはじめとして国内外で多くの栄誉に輝いた。さらに、日本薬学会会頭など薬学領域の学会の要職を歴任すると共に、日本学術会議会員を3期務めるなど、広く学術の発展に貢献された。

(大学院薬学研究科)

お知らせ

「第1回京都・先端ナノテクスクール」&「第8回ナノ工学セミナー」
ジョイントフォーラム

URL : <http://nsn.kyoto-u.ac.jp/collab/school/200711/>

今回、「ナノ工学セミナー」では京都大学ナノ工学高等研究院の「分子ナノ」、「量子ナノ」、「バイオナノ」グループによる最前線の「ナノテク」研究成果紹介と、東洋大学の和田恭雄先生による分子エレクトロニクス、東京大学の片岡一則先生によるナノバイオに関する特別講演を組み入れました。「ナノテクスクール」では電子線描画、走査型プローブ顕微鏡、分光エリプソメトリーの基本原理説明・応用および最新の技術動向についての講演が行われます。

1. 日 時：11月21日(水) 10:00~19:00
2. 場 所：京都大学桂キャンパス ローム記念館大ホール
3. プログラム：午前の部 10:00~12:00 ナノテクスクール
午後の部 13:00~17:45 ナノ工学セミナー
4. 参 加 費：無料(交流会参加費：¥2,000 (学生は¥1,000))
5. 申し込み方法：URL : <http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp/Nanotech/school/apply/>
6. 定 員：300人(特に所属・資格は問いません。)

農学研究科シンポジウム(No Border Agric.) 多様性の中の統一を目指して

第5回

1. 日 時：11月29日(木) 16:30~18:00
2. 場 所：農学部総合館 1階W-100講義室(京都大学北部構内)
3. 演題と講師：コーヒー危機とフェア・トレード –「キリマンジャロ」のフードシステム分析を通して–
生物資源経済学専攻 准教授 辻村 英之
昆虫の探索行動－虫はどのようにゴールを目指すのか？－
応用生物科学専攻 教授 佐久間正幸

第6回

1. 日 時：12月21日(金) 16:30~18:00
2. 場 所：農学部総合館 1階W-100講義室(京都大学北部構内)
3. 演題と講師：木質系繊維を磁場でならべる –新たな材料創成への挑戦–
森林科学専攻 教授 木村 恒久
水産物の悪玉色素と善玉色素 –エビ、カニも墨をつくる–
応用生物科学専攻 教授 平田 孝

来聴歓迎、入場無料、事前連絡等不要

問い合わせ先：京都大学大学院農学研究科 研究協力掛 TEL：075-753-6411

主 催：京都大学農学研究科

共 催：京都大学農学部四明会

無料法律相談のお知らせ

—12月4日(火)・12月6日(木)実施分について申し込みを受付中—

京都大学法科大学院では、授業の一環として行う法律相談実務演習(リーガル・クリニック)において、月に2回、無料法律相談を実施しております。

この無料法律相談は、日常生活の中で生じるさまざまな法律問題について、弁護士の立会いと指導のもと、既に法律知識を習得している法科大学院3年次の学生が市民の方々からのご相談に乗り、必要な助言を行うものです(秘密は厳守いたします)。

現在、12月4日(火)・12月6日(木)実施分について申し込みを受付中です。詳細は以下をご覧ください。

京都大学ホームページ「ご利用いただける施設」

http://www.kyoto-u.ac.jp/access/05_jyoho/jyoho_3.htm

あるいは

京都大学法科大学院ホームページ

<http://lawschoollaw.kyoto-u.ac.jp/lclinic/info001-19.html>

問い合わせ先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院法学研究科大学院掛 リーガル・クリニック担当者

TEL：075-753-3262 FAX：075-753-3129(午前10時～午後5時／土日祝休)

医学領域 産学連携セミナー2007 ～成功する医学領域の産学連携を考える～

1. 日 時：12月7日(金)15:30～18:00
2. 場 所：芝蘭会館 本館 稲盛ホール(京都大学医学部構内)
3. 参 加：事前申込制(申込締切：11月30日) 無料
4. 内 容：開会挨拶 医学研究科社会健康医学系専攻知的財産経営学コース 准教授 田中 秀穂
「バイオ・創薬・医療分野における長期・大型産学連携」
医学研究科社会健康医学系専攻知的財産経営学コース 准教授 田中 秀穂
“Industry-academia collaboration in pharmaceuticals research”
東京大学先端科学技術研究センター 教授 Robert Kneller
「製薬企業サイドから産学連携に期待すること」
アステラス製薬株式会社 常勤顧問 古市 喜義
閉会挨拶 「医学領域」産学連携推進機構 副機構長 寺西 豊
5. 申 込 方 法：お名前、ご所属、電話番号、E-mail アドレスまたはFAX 番号をご記入のうえ、11月30日までに下記問い合わせ先へ E-mail または FAX で事前にお申し込み下さい。
6. 問い合わせ先：京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻 知的財産経営学コース(担当：仲里)
〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町 京都大学医学部構内
TEL：075-753-4671(内線：4671) FAX：075-753-9333
E-mail：motkyoto@pbh.med.kyoto-u.ac.jp URL：http://www.motkyoto.com/
7. 共 催：京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻知的財産経営学コース
京都大学「医学領域」産学連携推進機構 社団法人芝蘭会

生態学研究センター・オープンキャンパス

大学院理学研究科の協力講座である生態学研究センターは、生物科学専攻に属する生態科学Ⅰおよび生態科学Ⅱの2つの分科から大学院生を受け入れ、生態学の研究教育活動、人材育成に積極的に取り組んでいます。研究分野は、水域生態学・熱帯生態学・生物間相互作用・理論生態学・分子解析生態学・保全生態学です。このたび、京都大学大学院生(修士または博士課程)として、生態学研究センターにおいて生態学の研究に取り組みたいと考えておられる方を対象に、以下の日程でオープンキャンパスを開催します。

研究スタッフなど詳しい情報は、ホームページをご覧ください。http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/

1. 日 時：12月8日(土) 研究内容説明会：9:00～11:10(第2講義室)
研究施設巡回：11:30～12:30
研究室訪問：13:30～17:00
2. 場 所：京大大学生態学研究センター(大津市平野2丁目509-3)
3. 問い合わせ先：陸域生物相互作用分野 大串隆之 Email：ohgushi@ecology.kyoto-u.ac.jp
4. 申 込 方 法：住所・電話番号・メールアドレス・希望研究分野を記入のうえ、11月22日(木)までにお申し込みください。
〒520-2113 大津市平野2丁目509-3 京大大学生態学研究センター 川田恭子
E-mail：k-kawata@ecology.kyoto-u.ac.jp FAX：077-549-8201

能楽鑑賞会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を下記のとおり開催します。本学学生・教職員各位におかれましては、是非この機会に狂言と能楽を鑑賞してください。

来場をお待ちしております。

1. 日 時：12月12日(水) 開場：17：30
開演：18：30(開演後の入場はご遠慮願います。)
終演：20：30(予定)
2. 会 場：京都観世会館 京都市左京区岡崎円勝寺町44 TEL：075-771-6114
(東山仁王門を東へ約300メートル)
3. 演 目：狂 言 鬼 瓦 茂 山 千 作
網 谷 正 美 他
能 楽 熊 野 片 山 九郎右衛門
片 山 清 司
福 王 和 幸 他

- 備 考 1. 入場無料(入場の際は、学生証又は職員証を提示してください。)
2. プログラムは当日に会場で配付します。
3. 定員は550名先着順とします。
4. 問い合わせ先：学生部学生課学生企画グループ TEL(内線)2504・2588

(学生部)

公開講座

玉城嘉十郎教授記念公開学術講演会(第46回) ー物理学のフロンティアとしての宇宙ー

1. 日 時：11月28日(水)15：00～17：00
2. 場 所：京都大学理学研究科2号館第1講義室(1階120号室)(市バス「京大農学部前」下車北側)
3. 演題と講師：宇宙交響楽ー宇宙マイクロ波背景放射が明かす宇宙の現在・過去・未来
名古屋大学大学院理学研究科 教 授 杉山 直
系外惑星ー宇宙の新大陸へー
東京工業大学大学院理工学研究科 教 授 井田 茂
4. 問い合わせ先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学理学研究科 総務掛
TEL：075-753-3600 FAX：075-753-3645
E-mail：somu@rigaku.kyoto-u.ac.jp
URL：http://www.sci.kyoto-u.ac.jp/modules/tinycontent6/

日誌 2007.9.1 ～ 9.30

- | | | | |
|------|------------------------|--------------------|----------------------|
| 9月3日 | 役員会 | 察のためベトナムを訪問(17日まで) | |
| 4日 | 部局長会議 | 18日 | シニアキャンパス2007(21日まで) |
| 6日 | 平成19年度全学教育シンポジウム(7日まで) | 19日 | 国際交流委員会 |
| 11日 | 企画委員会 | 21日 | 企画委員会 |
| 12日 | 総長外国出張 | 25日 | 博士学位授与式 |
| | ベトナム国家大学ハノイ校およびフエ大学 | 28日 | 図書館協議会 |
| | との「大学間学術交流に関する一般的覚書」 | 29日 | ジュニアキャンパス2007(30日まで) |
| | 調印式に出席および学術交流の打合せ・視 | | |

隔地施設 紹介



フィールド科学教育研究センター 上賀茂試験地 (<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/kami/>)

はじめに 上賀茂試験地は、フィールド科学教育研究センターの里域ステーションに属しています。森里海連環学の立場から環境や生態系を様々な視点から研究していく中で、人間の影響を最も強く受けている里域のうち陸域に関する研究をする研究施設の中核的な位置を占めています。



上賀茂試験地事務室周辺

沿革 上賀茂試験地は、1926(大正15)年、京都大学農学部附属演習林が創設された2年後に設置されました。農学部附属演習林は、農学部林学科の教育、研究の場として活用されてきましたが、当時の演習林には、実際の林業を試行する演習林と、これを有効に行うための基礎的研究を行う試験地が設定されました。その中で、上賀茂試験地は試験地の中心としての役割を担ってきました。

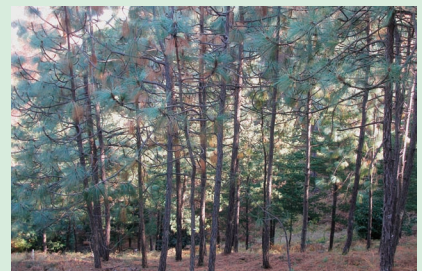
戦前の上賀茂試験地は現在の場所にはありませんでした。当時の試験地は、終戦直後に進駐軍に接収され、現在は京都ゴルフ倶楽部(上賀茂コース)となっています。接収に伴い、1949年、農林水産省から所管替えを受けて移転した場所が現在の場所です。

この移動によって貴重な植物の一部が失われましたが、現在でも京都ゴルフ倶楽部内には旧上賀茂試験地時代の植物が伝えられています。以後、1950年の隣接地の購入、1951年、1958年、2002年の所管替えを経て、現在の姿になりました。

所在地と環境 上賀茂試験地は京都市北区上賀茂本山に位置し、京都大学の本部キャンパスからは、直線にして北に5 km程度、車で25分ほどの距離です。叡山電鉄の京都精華大学前駅が最寄りの駅で、ここからは徒歩10分程度で来ることができます。総面積は47.0ha、谷を隔てた東向かいに京都精華大学、尾根を隔てた西側に京都産業大学があり、隣接する北側にはかつては上賀茂試験地の所有地であった土地に総合地球環境学研究所が所在します。

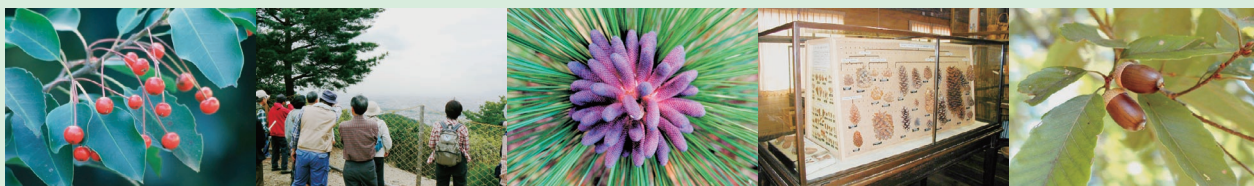
標高は109m~225m、京都産業大学の敷地に接する最高地点付近からは、京都盆地を南西方向に一望でき、晴れ渡った日には京都駅ビルはもちろん、遠く奈良県北部の山々や大阪府枚方市までが遠望できます。地質は古生層に一部新洪積層が混ざり、母材は砂岩や粘板岩からなります。土壌は浅く、酸性で養分物質が乏しい状態です。年平均気温は14.6℃、年降水量は1582mmで、例年冬季に数回の積雪があります。

総面積の65%はヒノキとアカマツに広葉樹が混交した天然生林、28%が外国産樹種を主とした人工林、7%が見本園、苗畑、建物敷地となっています。天然生林はかつてはほとんどがアカマツ林でしたが、1970年代以降のマツ枯れ被害の拡大により、1990年代以降は、100年生以上のヒノキを含むヒノキ優占の林となっています。主な広葉樹は、コナラ、ソヨゴ、ネジキ、リョウブ、ヒサカキ、コバノミツバツツジなどです。



マツ属見本園

研究と教育 上賀茂試験地が現在地に移転した敗戦からの復興期は、大学では荒廃した森林と林業を再生するための研究が行われた時期でした。上賀茂試験地では、木材生産に有用な樹種を、国内自生種のみならず、海外の樹種からも見つけ出すことを目標にした研究が行われました。この目的を達するために、世界中の樹木の種子を取り寄せて、各樹種の成長が検証されました。その中で注目されたのがマツ属です。世界各国の研究機関とのネットワークから得た種子を用いて、様々なマツが植栽されました。これらの植栽地は現在もマツ属実験林として伝えられています。マツ属の種は世界に約100種あるとされていますが、これまでに85種が集められました。これらのマツを用いて、交雑育種に関する研究が行われたほか、1980年代以降には、マツ枯れの原因となるマツノザイセンチュウに対する抵抗性に関する研究も行われました。



この時期に構築された世界各地の研究所とのネットワークは現在も継続しており、約120の機関との種子交換を行っています。これまでに世界各地から取り寄せた樹木の種子は約4300種にのぼります。このうち、発芽して植栽され、成長している種は、99科、350属、750種にもなります。植物にかなり詳しい人でも、見たことのない樹木がたくさんあるのが上賀茂試験地です。このことは大きな特徴であるといえるでしょう。1950年には中国で生きた化石として再発見されたメタセコイアの苗木が日本に送られてきましたが、そのうちの3本は今も上賀茂試験地にあり、樹高40m近くに成長しています。一方、数棟あった温室で日本の気候に適応できない樹種も数多く栽培されていましたが、温室の維持が予算不足のために不可能となり、多くの種が失われました。

職員構成

教員 2人、技術職員 6人、
大学院学生 3人

上賀茂試験地の持つコレクションはマツ属、ツツジ属に加えて、タケ亜属に代表されます。タケ類については、開花が希にしか記録されないことから、開花周期を知るために開花時に種子を収集して蒔き、それを育てています。これまでに、モウソウチクの発芽後67年目の開花が、1979年と1997年に記録されています。このような、結果がわかるまでに数十年以上かかる研究は、大学のような研究施設でしか行うことができません。上賀茂試験地はその重要性を認識した上で、植物を維持しています。コレクションは樹木が中心であることから、1990年代から、樹木園として位置づけ、維持管理を続けています。



竹見本園

上賀茂試験地には様々な標本を展示する標本館もあります。現在、樹木の材鑑標本が5000点、種子標本が700点など、総計約1万点の標本があります。



森林生物学実習

上賀茂試験地では、全面積の半分以上を二次的植生が占めています。これらの植生は、京都盆地をとりまく植生の一部として重要です。京都市の名勝の多くが世界遺産の指定を受ける過程では、上賀茂試験地は上賀茂神社の奥山として注目されました。上賀茂試験地の二次的植生は、京都盆地周辺を代表する里山植生の一つであり、里山の再生手法を検討する場としても研究が進んでいます。これまではそれほど大きな注目は集めてこなかった天然生林ですが、現在では里山研究の一つの中心として、上賀茂試験地の天然生林は重要な位置を占めるようになっていきます。

上賀茂試験地は本部キャンパスからの交通が至便であることから、数多くの教育・研究利用があります。教育面では、樹木識別、植物観察、土壌物理学、庭園管理などの実習の場として、学内外から利用されています。また、小学生らを対象にした環境教育の場としての利用があるほか、試験地が自ら行う一般を対象にした自然観察会を毎年数回行い、地域の方々に公開しています。研究、教育ともに、その内容は、かつての林業色の強いものから、生態や環境を学ぶものにシフトしているようです。上賀茂試験地は常に、森林植生の不思議を解き明かすために、また、人間と森林との関係を研究するために場を提供してきました。2003年には農学部附属演習林から、独立部局であるフィールド科学教育研究センターの一員となりました。樹木園に要求される遺伝子バンクとしての機能による貢献、二次的自然の再評価のために重要と考えられる里山の管理に関する新たな提案、といういずれも地球環境問題を考える上で最も重要な課題を解決する場として、さらに活動を進めていくことになります。

連絡先 上賀茂試験地

住 所 〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 2
電 話 075-781-2404
F A X 075-723-1262
E-mail kamigamo@kais.kyoto-u.ac.jp

アクセス

- ・地下鉄国際会館前駅から京都バス「京都産業大学行き」で京都精華大学前駅下車徒歩約10分
- ・叡山電車「鞍馬行き（または二軒茶屋行き・市原行き）」で京都精華大前駅下車徒歩10分